【Ⅲ.研究ノート１】

塩竈の自然と文化に根ざした子どもの多世代交流と学びの居場所作り

人間科学科３年　平良菜月
教育人間学科４年　増山友香
人間科学科２年　松下遥奈
地域創生学科２年　佐藤朱莉
地域創生学科２年　大塚未来
地域創生学科２年　安田陸人
教育人間学科３年　早川　誠
仏教学科４年　田邊孝顕
仏教学科４年　杉浦寛生

大正大学３類科目サービスラーニングの位置づけで、浦戸桂島復興連絡協議会による塩竈市「塩竈アフタースクール事業 Shiogama こどもほっとスペースづくりプログラム」の取組に参加。学生の実践学習と地域貢献活動の推進に取組んだ。以下に学生の学びと実践の成果という視点から取組内容を報告する。

１．事業目的

震災後の労働環境の急激な変化と多様化、コミュニティ力の低下が叫ばれる中、子どもの孤食化や休日の地域での安全な居場所確保に課題を抱える状態にある。一方で市内には豊かな自然・文化的資源とそれを担う多様な住民が居住しており、地域に根ざした多様な潜在的教育力の存在が着目される。

本事業では、土日や長期休暇を活用して、塩竈市の自然・文化に根ざした交流と学びの場を設定し、子ども達に提供することで、世代間交流・学びを促進し、子どもの居場所としてのコミュニティの教育力を強化する仕組みを創出することを目的とする。
運営にあたっては地元大学生・高校生等のスタッフ参加を促進し、高齢者から若者まで、子どもを軸とした地域内コミュニケーションの活性化も合わせて図っていく。

２．事業概要

塩竈市・浦戸の自然文化を題材にして、地元大学生・高校生等から高齢者まで多様な世代の住民との協働により、以下に掲げる料理教室・工作教室・散策会を実施し、市内小学生に提供する。頻度として 11 月～１月にかけて開催。

プログラム運営に当たっては、アイスブレイク、会食、グループワークショップ活動を取り入れることで、中心的に対象とする子ども同士の関係性構築を促し、友人形成できるよう

配慮していく。また、当事業趣旨を踏まえ参加費は基本的に徴収しない。

（1）ふるさと料理教室

場所：雲上寺、武山荘他

対応：地域のお母さんたち・がんばる浦戸の母ちゃん会ほか地域の女性達、
地元大学生・高校生等の若者

内容：塩竈・浦戸地域のふるさと食材（海産物等）を用いた郷土料理教室と試食会

頻度：11～1 月　計 6 回

（2）ふるさと工作教室

場所：雲上寺、ステイステーション他

対応：地域のお父さんたち、地元大学生・高校生等の若者

内容：松島湾の流木等を用いたフォトフレームやストラップ、その他玩具作り

（3）島巡り散策会

場所：浦戸諸島

対応：海業・農業等従事者、地元大学生・高校生等の若者

内容：浦戸諸島における海産業の見学体験と遊歩道散策と里山づくり体験活動
（開催に当たっては子どもたちと島民との交流による事前準備プログラムを実施）

頻度：12～1 月 3 回

４．実施成果と学生の振り返り

（1）浦戸の食から交流を深める　平良菜月（人間科学科 3 年）

1）はじめに　コミュニケーションを育むために

当事業にかかわるに当たって、私が設定した当初のテーマは「島間のコミュニケーション・島の伝統料理」だった。4 島ある桂島で、島間の交流がほとんどない・少ないという情報をもとに設定したものである。島の住民が島の食材を利用した料理を提供することで、島の料理をきっかけに 4 島の交流が深められると考えた。また、私たち学生が介入し、子ども達が居場所としてかかわることによって、島間のコミュニケーションのきっかけになるのではないかと考えた。

写真　子ども達とのオリエンテーションの様子
（塩竈マリンゲートにて）

２）活動内容

浦戸諸島の食を広める活動を行った。当事業において私が実際に行った際の食に関する活動を報告する。

①10 月 27 日（土）ゆうわ子ども食堂

「ゆうわ子ども食堂」は当事業の参考とさせていただいた先行的取組の一つである。行われた子ども食堂のスタッフとして参加した。当初、子ども食堂は火曜日の夕方に行われていたが、帰宅時間が遅くなることが危惧され、土曜日に開催されることになった。この日は、近くに小学校でイベントがあり、子どもの数が少なく大人が多いという形となった。

子ども食堂ということから、地元のお母さんたちがこの日のために企画した料理が振る舞われた。最初、別メニューを想定していたが、地元の方から練り物などをいただき、多数あったことから、メニューを変更しておでんになった。彩りもとても鮮やかで、ただ「食べる」ことだけでなく、地域の方々のおすそ分けなどを通じた「食」の在り方を考えることのできるメニューとなっていた。

②12 月 26 日（水）第 4 回子ども料理教室

全 5 回行われた料理教室のうち第 4 回目の子ども料理教室では、牡蠣シチューと手作りピザを作った。前回の子ども料理教室で、子どもが自由に動き回るなど、子どもに対する危機管理面での反省があったことから、今回は子どもを学年別に班分けするとともに、班ごとにリーダー学生やサポート学生を設け、役割分担を明確化するなど、子ども一人ひとりに気を配り、見守る状況を作った。班ごとに分かれたおかげで、自分の班の子どもの名前、人数を把握しやすくなり円滑に行うことができた。

子どもは牡蠣が苦手な人が多いという懸念から、子どもでも食べやすいものを提供することが求められた。今回の牡蠣シチューは、美味しそうに食べ、おかわりをする子どもが多くいた。手作りピザは、餃子の皮に子どもが自分でソースを塗り、ウインナーやコーン、シーフードなど好きな具材を自由にトッピングした。焼く工程は大人が担当し、自分が作ったピザを誇らしげに食べていた。

写真　子ども料理教室の様子

③1 月 13 日（日）第 5 回子ども料理教室

子ども料理教室最後は、メインイベントの餅つき大会だった。前回の班分けが功を奏したため、今回も宮城学院女子大学・新潟青陵大学の学生と共に班ごとに行動した。

餅つき大会は、子どもが餅を食べることに加え、実際に餅つきを行った。このとき、補助をしたり、掛け声をかけたりして、前回同様安全面には十分な配慮を行った。その結果、当初は食べ終わった子どもが体育館を走り回り、暴れることを想定していたが、そのようなことはなかった。餅のほかに、玉こんにゃく・餅を使った雑煮、ソフトドリンクが用意され、子どものみならずその保護者や地域の人も楽しめたイベントだった。

３）考察－親・子と居場所の関係づくりと島との交流－

まず、子ども料理教室など、子どもに観点をおいた活動を多く行ったことについて考える。第 4 回子ども料理教室では、子どものみが島に渡り、保護者は子どもの見送りのみであった。これは、子どもと親を離し、子どもは親以外の大人・ほかの学年の子どもと関わることで、親から自立を促すことが可能になると考えられる。また、親にとっても、子ども中心の生活から少し距離を置くことで、自身の時間のゆとりができ、子どもとの関わりがより密になるのではないか。また、子どもたちを見るのも大学生という、年齢的には大人でも、社会的には大人よりも子どもの年齢構成のため、子どもたちのお兄さん・お姉さんという位置づけとなり、より子どもと親密に関わることができたのではないかと考えられる。

次に、島外の人との交流について、子どもが島の交流の懸け橋になっていると思われる。子どもが島に渡ることによって、地域住民は子どもに温かい目を向ける。地域の方がガイドした際、子どもの探求心を刺激する材料が多く存在し、その疑問を解消してくれる人が地域の人である。そして、その子どもが得た知識は親を介してさらに発展することが見込まれる。これは、まさに子どもを介した島と本土の文化・知識の交流である。こうした展開を意識してみると、さまざまなことが可能になってくると考えられる。

４）おわりに　今後の課題

当初の私がテーマとした「島間のコミュニケーション・島の伝統料理」は今回残念ながらあまり達成することはできなかった。４島を巡り、それぞれの問題を考慮したうえで設定するためにはある程度踏み込んだ情報とそれを得る期間が必要となってくる。今回の事業では、一回の滞在日数が長くても２泊３日と短く、深い内容まで関わることができなかった点で課題が残る。今後の展開に向けては、費用対効果を考慮しつつも、長期間にわたって滞在し継続的に取組めるような体制構築が望まれる。

（２）食を通じた子どもとの交流と学習の実践　　増山友香（教育人間学科 4 年）

浦戸の活動では、４島の交流ができる媒体として、料理のイベントを行う発想が当初からあった。島の食材を使って料理をすることで、島資源の再発見、島民同士の交流ができると考えたからである。しかし、ただイベントを行うよりも、島のレシピの発信やそれに結び付けた物販促進が重要であると考え、島にあるものの発信に重点を置いて考えるようになった。

１）島のレシピ発掘

島の食材やレシピを発信するためのパンフレット作成作業では、インターネットからの

情報の限界を感じ、現地の情報が必要であると痛感した。島に伝わる郷土料理や家庭料理を知りたく尋ねたところ、料理よりも、素材の活用方法が様々あることが分かった。例えば、海苔の佃煮は家庭によって味が違うこと、鱧料理の講習会がある、などである。商品開発や企画は、行うところもあるが製品化まではいかないそうで、新たなレシピ開発の難しさや、レシピとして公開されているような料理はないことが分かった。しかし、子ども料理教室で行った牡蠣カレーは、牡蠣が身近にある人でないと、なかなか食べられないメニューである。参加した子どもたちもスタッフ側の学生も初めて食べたと答える人がほとんどであった。交流を通して、島の方が普通だと思っているものから、他の地域では珍しい、島特有の活用方法を知ることができるのではないかと感じた。料理開発ではなく、島の素材を生かした料理に焦点を当てていくことが今後必要であると考える。

２）子ども料理教室

子ども料理教室は、子どもも食べやすい牡蠣料理を作ること、子どもが参加しやすい料理を作ることの２点をコンセプトに実施した。全５回行ったが、それぞれ参加人数、スタッフの数に違いがあった。危機管理、スタッフが対応するための事前準備や情報共有は共通する課題である。子どもも食べやすい牡蠣料理を作ることについては、牡蠣が苦手だと話していた子どもたちもお代わりをするほど食べてくれたことなどから達成できたのではないかと考える。

ただし子どもが参加しやすい料理については、子ども一人ひとりの料理の経験が違うため参加人数が多くなるほど、料理が苦手な子どもに合わせるために物足りないと思う子どもが出てしまった。今後はレベル別に分けることや親子料理教室としての展開も視野に入れる必要がある。

３）今後の連携・交流の重要性と継続について

子ども料理教室（工作・島探検含む）が、浦戸諸島と浦戸諸島外の人々の交流の場になった。今回の取組でお話を聞いて、実際、塩竈市内の方々は浦戸諸島へ行く機会が少ないことが分かった。５回目の子ども料理教室に参加してくださった方は、震災の前までは親子で浦戸に行くという小学校での行事があったけれど、今はなくなってしまったとお話ししてくださった。その意味でも、子どもを対象とした事業の継続が重要であると考える。そのために必要なのは現地の人と交流・企画ができる人であり、その役割の一端を学生が担うことができないかと考えている。小学校や中学校での校外学習とは異なる、子どもの教室を開くことで、子ども同士の交流にもつながり、島の人の話や、先生でも親でもない大学生との交流から新鮮な学びを得ることができるのではないか。

継続性の問題についてだが、在学期間が限られる学生の活動は一般的にいって引継ぎが難しいものとされている。マニュアル化や活動した人の声を残しておくこと、次に活動する人への引継ぎの徹底が重要であると考える。今後は、このような活動を複数の様々な大学と連携していくことで大きなネットワークを構築したい。

（３）子ども体験・交流による島づくりと居場所作り－食を中心として－

大塚未来（地域創生学科２年）

私は以前から、大学の実習活動でお世話になった際、塩竈市浦戸諸島には多くの活用できる資源があることを知った。その中で食を通じて、島外の子どもに地域を PR することができるのではと考えた。今回、親子料理教室の運営に参加したことで、学生として、塩竈での子どもの居場所づくりに関わることがどのような意義を持つかを改めて考えさせられた。

第１に、本土側でこのようなイベントを行うことは浦戸諸島の食や文化、そして人といった地域資源を PR することにつながる。例えば、今回参加してくださった子どもや保護者様から、「工作が楽しかった」、「またこのイベントに参加したい」といった声が多くあり、リピーターをつくることができた。また、「親子」で参加していただけることにより、日常の中でも浦戸諸島や料理教室で学んだことを話したりする機会が増える可能性がある。そのため、食を通じて、浦戸諸島について興味を持つきっかけづくりとして充実したものとなったといえる。さらに、参加してくださった方が実際に島に行くことも期待している。

第２に、今回の料理教室の設営は学生スタッフが中心となって行われた。そのため、準備不足やリスク管理の仕方に不案内で、子どもたちとの関わり方に困難を覚えるといった学生個人の問題が生じた。しかし、そういった経験を次にどう生かしていくべきかを考えていくことが非常に重要である。また、学生同士が集まる機会が少なかったものの、SNS を活用しながら、振り返りや引継ぎを比較的にスムーズに行えたのは良かった。

第３に、活動の継続性についてである。子どもたちが大人になっていくまでの時間に塩竈の魅力に接してもらう機会を多く持つことは、地元に離れても帰ってくる居場所のようなものがあるという「愛着」を持ってもらうことにつながるのではないか。そのため、こういった活動を継続していくことが重要だ。

当事業は、活動の中で協力してくださった方の思いや願いが子どもたちやその保護者に通じているからこそできる活動である。そのため、今後の活動にも積極的に参加して行きたいと考えている。子どもの居場所にとって必要なのはいろんな人との交流だ。活動を支えている人が増えていくことや活動が意義深いものになることが塩竈市の子どもを育てていくことになるのではないか。人との出会いに感謝することを忘れずに、人との交流を大事にしていきたい。さらに、そのつながりの輪を広げていきたいと考えている。

（４）ゆうわ子ども食堂からの学びと今後の展望　松下遥奈（人間科学科２年）

子ども食堂が開かれているゆうわ館は、塩竈市本土にある病院の敷地内にあり、建物を含む設備などは病院の先生が個人出資で設立した。本来は、高齢者・障がい者を含む地域の住民たちが集まれる交流の場を目的として設立された。

当初は子どもたちが全く来なかったが、３年目を迎えると徐々に足を運ぶ子どもたちが

増え、最も多い夏祭りの時で 50 人も参加したことがあるという。現在では、15〜30 人の子どもたちが遊びに訪れているほどの盛況ぶりである。子どもたちだけでなく、スタッフや地元の高齢者まで、幅広い年齢層が利用している。上記の話は学生が子ども食堂の会合に参加して聞けた内容である。ゆうわ館では毎月第４土曜日に子ども食堂が開かれている。作っているのは、地元の有志のお母さん方である。食事をするだけでなく、地元のお母さん方やボランティアの方々とも遊んでいる。子ども食堂で振る舞われる料理の食材は、子ども食堂の運営に携わっている方々からの頂きものである。

ゆうわ館は市内や市外からの利用者がおり人気があるということから今後、学区単位で子ども食堂を展開していくことを目標としている。このようなことから既存の子ども食堂活動と連携を深めながら子どもの居場所作りや地域の人々との交流の場を構築していくことが大事であると考えられる。

（５）工作教室の実践から　　安田陸人（地域創生学科２年）

当事業の一環である子ども工作教室を担当した。工作教室は全４回行ったが、私は全ての工作教室を担当した。この工作教室では浦戸諸島の自然を活かした素材（流木や貝殻、花、枝、その他諸々）を使用し、子どもたちが何か物を作ることで浦戸諸島の自然を味わうことができると考えた。

１）全４回の工作教室から

11 月 25 日に第１回目の工作教室を雲上寺にて行った。このような工作教室は、過去の学生活動で行ったことがあり、そのとき担当した学生と連携すると共に、宮城学院女子大学の学生の協力を得てこなすことができた。初回ながら参加した子どもたちの満足度はとても高いように感じた。第 2 回は 12 月 2 日、雲上寺で 1 回目と同様に写真フレーム作りを行った。子どもの数は増えた一方で、学生側は４名のみでの対応だったが、保護者の助けと 1 回目の経験を踏まえることで、初回よりもスムーズに進行を進めることができた。第 3 回は 12 月 16 日桂島で行われた。島での開催は初めてである。ここからリピーターの子どもたちが多く訪れるようになった。この回はホタテレター入れの編み物を島の住民である内海信吉氏指導の下で行った。ただし編み物は難易度が高く、低学年の子にはなかなか難しかったのではないかと考えられ、課題が残った。第 4

写真　工作教室の様子

回は 12 月 26 日に同じく桂島のステイステーションで内海信吉氏指導のもとホタテレターを作成した。大学生が８人いたことから１人の子どもに対して多くの人数で見守ることができた。前回の反省からタイムスケジュールを厳密に作成することで進行に支障がないようにした。ホタテレターもホタテの貝殻に絵を描くという簡単な作業で子どもたちも今までで一番楽しめていたと感じる。

２）準備とリスクマネジメントの重要性

全 4 回の工作教室の経験から準備から遂行するまでとても大変なことが分かった。しかし、マニュアルの作成やリスクマネジメントの大切さも同時に学べた。マニュアルを作成し、タイムスケジュールを作成することで、素早くスムーズに行動や進行を行える。リスクマネジメントの面では子どもたちにケガや危険が及ばないようにするために一番必要なことであると感じている。

３）島の魅力を知ること、塩竈の魅力を知ること

地元の子どもたちに浦戸諸島の魅力を知ってもらうことは、塩竈のことを更によく知ってもらうことにも繋がると感じ、地域教育の機会になると考える。今回の事業ではリピーターの子が多くおり、どのプログラムも「楽しかった！」「おいしかった！」と声が聞こえてこちらも嬉しくなり、やりがいを感じた。一方で子どもとの関わりおいて、リスクマネジメントを考えなくてはいけないことが課題としてあげられることを痛感した。子どもの予測不可能な行動や、元気なことは良いことだが、あまりにもはしゃいでしまう子もいる。引き続きリスクマネジメントの研究にも取組んでいきたい。

（６）子ども活動と安全対策　佐藤朱莉（地域創生学科２年）

11 月後半から本格的に取組み始めた当事業において、私は昨年 12 月 16 日のツアープログラムと、翌年 1 月 13 日の餅つき大会の運営に参加した。始めはゆったりと島を子ども達と一緒に散策するイメージだったが、当初想定していたよりも子どもの参加人数が多いため、新鮮な感覚を持つと共に戸惑いも感じてしまった。これまでの活動でほとんどリスクマネジメントを意識したことが無かった。だが、この事業では特に意識をもって注意しないと落ちてしまいそうな場所など、異なる立場の人の目線で見ないと気付けない部分があった。

私は子どもを相手にする体験を通して、今まで感じていなかった海や島の危機感を認識した。また、私にとっては初めて島の人の立場になって外部の人を招く体験にもなった。これまでも浦戸には何度も訪問し、島の魅力を発信する活動を行ってきたが、島内に居る間は島のことを学ばせてもらう、受身の姿勢ばかりであった。島の住民に囲まれている限りは私も一人の外部の人間に過ぎず、同じくらい詳しくなることは難しいかもしれない。しかし、外からの客人を相手にする上では、私も島のことを知っている者として対応しなければならない。したがって、一時的でも住民と対等の人間に少し近付くことができ、浦戸諸島で学習してきた達成感を覚えた。

「ツアー」「子ども」「料理教室」「工作教室」という、これまでは触れなかった事柄を、

この事業では体験することができた。危機管理能力や主体性、計画性など、新たな学びに繋がったので、今後もより一層、浦戸諸島で新しいことに挑戦していけるのではないかと思いを新たにしている。

（７）島の歴史文化散策活動　　早川誠（教育人間学科３年）

私が本事業においてを担当したテーマは塩竈の歴史・文化である。主に浦戸諸島を中心として、どのように歴史文化財を活用していくことができるか、具体的には浦戸諸島の歴史や文化を巡る地域ガイドの構想を考えた。

実際に塩竈市を訪問した。浦戸諸島内を調査してみるとガイドをする上で幾つかの問題点が明らかになった。まず、浦戸諸島の四島それぞれでガイドする場合島内の移動手段が徒歩しかなく、一島ガイドするだけで時間がかかってしまうことである。一島ごとに見どころはあるが、時間を短縮するための近道もなく、移動手段も徒歩なため、時間がかかってしまう。また、島を跨いだガイドを行おうと企画すると島間の移動は船であるため、時間をきちんと把握し、適正なタイムスケジュールでガイドを行う技術が必要となる。波が荒い場合は船が出航しない場合もあるため、移動をどのようにスムーズに行うかが島のガイドでは重要な課題になると考えられる。

本事業で行った小学生対象の地域ガイドでは、ガイド者として島の住民である内海信良氏を中心として、学生はそのサポートと小学生の面倒を見る役割で案内をおこなった。この企画はガイドの他に料理教室と工作も含まれており、時間通りに動く必要があった。初めての経験だったこともあり、時間通りに動くことはできない場面もあった。集合から開始までの流れをスムーズに行うべきであった点と子どもをスムーズに集合させることができなかった点で、難しさがあった。また、島の歴史を学び、理解を深めながらガイド活動に臨む必要もある。

以上の課題が残るものの、島の散策であらためて見どころの多い島であると感じている。また、島の規模は私が当初予想していたものよりも大きく案内しがいがある地域であり、子ども達も十分に満喫できる潜在的存在があると考える。今後も引き続き島の魅力を掘り起こし子ども達の体験や学びのために提供することを通じて、島づくりと子ども居場所作りの双方に寄与するような活動へと展開させていければと考えている。

写真　散策会の様子

（８）寺院と歴史文化を生かした居場所作り活動の可能性について

田邊孝顕（仏教学科４年）

１）寺院や神社仏閣を場とした子ども活動

当事業において、本土側では雲上寺を会場に、浦戸側では、島の自然や食、そして神社仏閣などを含む歴史文化を素材とした活動を行った。

２）雲上寺での活動とリピーター

まず雲上寺主催のイベントを継続させることの重要性について触れたい。参加する子どもたちの多くは小学校低学年の層が多く、またほとんどがリピーターの子どもたちであった。これからの展開で望まれるものとして、楽しい思い出が作られたことで、イベントに興味や関心を抱いてくれた参加者からら口コミが広まることである。リピーターの子どもたちの多くが、学生スタッフのことを覚えており、一部では懐いているといった印象を受けた。確かに学生には卒業という制限時間があるが、可能な限りで継続していきたい行事であると考える。

３）浦戸諸島での活動について

一方、島でできるコンテンツをさらに探すことも含め、より安全に遊べる環境を増やすべく、遊歩道や白石廣造邸、また他の島の整備を進めたいと考える。子どもたちのみならず、浦戸諸島にさまざまな方が来ることによって、参加者もが安全に遊べる場所を増やすことが大事ではないか。来島者も島の住民も豊かになれるような子どもの居場所作りの展開を模索したい。

４）浦戸の地域づくりへのかかわり

まだ途上ではあるがハード面において震災からの復興は進んできており、道路は地元の企業によって舗装、整備され、車での通行がしやすくなっている。桂島では海水浴場前の道路のアスファルト化が、野々島では波止場の防波堤など、住民のためのインフラの整備が進んでいるような印象を受ける。そのため、浦戸諸島の住民が少しずつ前を向いていくための環境整備は整いつつあるのではないかと感じた。さらに前を向いていくために、自分自身も今後もかかわりながら、来島者が利用する遊歩道や白石廣造邸の整備、また寒風沢島の田畑等の整備に寄与できればと感じた。

浦戸諸島が 10 年後にはどのように整備・発展していくのか、今後も積極的に関わっていきたい。

（９）宗教と地域の共同の可能性に関して　杉浦寛生（仏教学科４年）

塩竈子ども教室は、第２回までは本土の雲上寺で行い、３回目から浦戸桂島に移行した。コミュニティの場としての寺院の活用は、全国的に行われており、珍しい話ではない。しかしながら、こういう活動が全ての寺院で同じように行える訳ではない。雲上寺は、同宗派の他寺院と比べても、経済規模、伽藍規模が比較的大きい用に感じた。さらに、朝の精進料理の集いや、ボーイスカウトの取り組みなど、コミュニティの創出の観点で手広く活動してい

る寺院といえるだろう。

雲上寺を利用して料理教室をおこなった事も、雲上寺が広い厨房など設備を持っていたから実現した。昨今では、仕出しやセレモニーホールに任せて、自ら料理を作ると言うことが無くなった。従って、厨房を置かない寺院も少なくない。そのような中で、雲上寺という場所が使用できたのは、誠に幸運だったといえる。

とはいえ、寺院を使用する意義として信仰面は排除できない。そのため、中には寺院で行われる活動に子どもを参加させることに抵抗を感じる親御さんもいらっしゃるかもしれない。また、宗教色をぬぐいきれないために他の社会教育団体が寺院を活用することに抵抗を覚える場合もある。今回は、大正大学の設立宗派の一つである浄土宗の一寺院であったこともあり、雲上寺を利用することが容易に出来た。要するに、知れないが、寺院と地域が結びつくためには一定以上の信頼が必要である。

宗教と寺院の結びつきの一端を考えるに、今回の事例は、宗教色を極力廃した上で、厨房をキッチンスタジオとして利用した、いわゆる、「寺院の公民館的利用」である。元々、公民館が出来る前にさかのぼると、寺院がコミュニティの場を担っていた事からも、むしろ正しい寺院の活用の仕方なのではないかと考える。宗教法人法に定められる、寺院が請け負う「公共性」の一つの形を提示したといえる。

寺院に無理のない範囲での寺院の活用は、社会教育団体・寺院共にメリットのある行為であると考える。このような事例を中心として、寺院を地域資源として活用する動き雅活発になることを期待し、さらに、宗教と地域の良好な関係について模索を続けていきたい。

【Ⅲ.研究ノート２】

新潟県粟島･阿賀町における地域教育実践活動の経過報告

エンロールメント･マネジメント研究所
地域創生学部地域創生学科　専任講師
出川　真也

はじめに

当研究室では、2016 年度より新潟県粟島浦村において、2017 年度より同県阿賀町室谷地区において、地元関係主体と連携した地域社会教育関連活動を機軸とした地域づくりの実践研究に継続的に取組んでいる。今年度の動きについて以下の通り報告する。

１．粟島　お手伝いプロジェクトの試行実施

（１）趣旨

離島のコミュニティ学習支援活動として、粟島浦村観光協会と共に、島民人材バンク「つながるカード」と「お手伝いプログラム」を軸とした交流の島づくり活動の展開に向けた試行実践研究を実施した。

（２）方法・実施内容等

１）日時８月６日～10 日

２）方法･内容

①島内資源調査･研究

・島内踏査、取材、ヒアリング調査等

・七夕祭や観音開帳等の行事見学、資料館見学等

②お手伝いプログラム試行実践

・民宿（配膳・清掃･布団上げ･整理・畑）・食堂（配膳・清掃・畑）

・畑（収穫･草取り）・定置網（魚さばき）・観光案内所（自転車・清掃）他

写真　訪問初日に行われた七夕祭の見学･取材

写真　お手伝い活動における協力者の皆様と離島の海体験活動から

（３）取組結果

活動結果をカードに取りまとめ、観光協会と共有し、今後の活動に向けた検討を行った。2019 年度ワーキングホリデー事業と絡めて、取組を進めていく予定としている。

図　つながるカード･お手伝いプロジェクトを通じた島づくり交流活動の展開イメージ

２．阿賀町室谷地区　青年会との連携による地域づくりキャンプ活動等の実践

（１）趣旨

豊かな山々に囲まれた阿賀町室谷地区の自然･文化を活かした交流活動を行うことで地域の活性化と次世代育成に寄与するため、方策を地元青年会である「室谷青年会」と共にキャンプ体験活動や伝統行事参加を中心とした実践活動を行った。

（２）方法･実施内容等

１）「室谷川キャンプ 2018」の実践　８月 10～12 日

川キャンプ、魚捕り、木集め、場所作り等、バーベキュー、川入り等

写真　室谷川キャンプの様子

２）伝統行事「室谷祭礼」への参加協力（9 月 9 日）

室谷青年会が中心となって行う地区の伝統行事、室谷祭礼への参加協力を行った

写真　室谷祭礼における神輿と子どもお楽しみ行事の様子

３）「室谷雪キャンプ 2019」　2 月 16~18 日

冬の自然と生活文化を活かした地域プログラムを行うことを主眼において、大正大学のほか、早稲田大学の留学生や東京農業大学学生をモニターとした「雪」の体験活動を実施した。

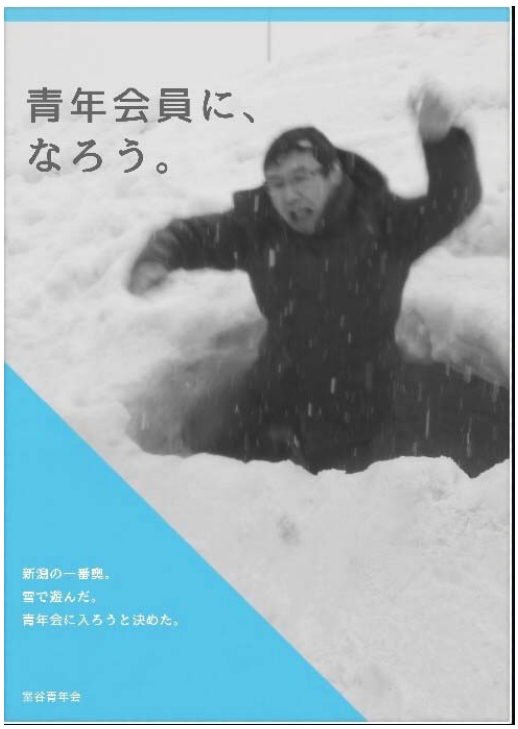
①除雪ボランティアと雪遊び、②山村の生活文化体験（まきストーブ、山菜料理、その他）、③地元青年会との交流。④次年度に向けた青年会･大学生･高校生･その他等との交流実践活動に関する意見交換を行った。

写真　室谷地区の一面の銀世界での体験活動

写真　除雪ボランティア、雪のアクティビティ、検討ワークショップの様子

（3）結果と今後の展望

青年会活動の最新の状況を踏まえつつ、2019 年度以降の取組を構想した。具体的には物産関係の取組とのコラボを検討中である。なお、物産販売事業と連動して、青年会の PR・参加促進策として、当研究室が撮影した 5000 点あまりの活動写真を利用したパンフレット作成についても検討を行った。



写真

今年度試みに作成した青年会パンフレットの表紙イメージ

次年度以降本格的に作成に取組むことを予定している。

【Ⅲ.研究ノート３】

「あきた元気ムラ山菜ネットワーク」を中心としたワークショップ及び調査活動の経過報告

地域創生学科２年　佐藤　絵里花
教育人間学科３年　伊藤　奈々江
地域創生学科　専任講師　出 川　真 也

１．はじめに・実施趣旨

2017 年度、秋田県活力ある集落作り支援室の協力のもと、首都圏連携等を視野に入れて「あきた元気ムラ・山菜ネットワーク」[1]を対象に、①地域集落を基本単位とする生業継承・活性化、及び②若手担い手人材の地域回帰方策について研究するための調査を行ってきた。

今年度は、さらに具体的に③住民側の課題解決・価値創出、③訪問者側の学習と交流、地域への寄与・貢献を促進するため、地元学とロジックモデルの手法を用いて、地域資源の可視化と活用策の検討を住民と行い、集落の課題解決と外部者の交流・学習の促進に資するプログラム開発を目指した。

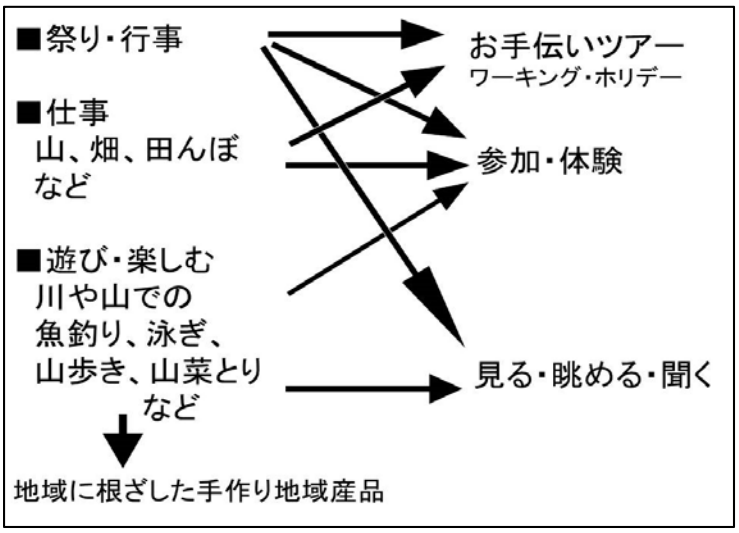


図　地元資源を用いたプログラム開発の方向性

２．実施内容

（１）現地調査とロジックモデルを用いたヒアリング調査の実施　８月－９月

県内５箇所において、地元学の手法による資源カードを用いた現地調査とロジックモデルシートを用いたヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査では、次図の通り、これまでの活動状況と今後の展望について、ワークショップによるディスカッションを通じて、言語化し特定化する作業を行った。

---

[1] あきた元気ムラとは「秋田県内の農山漁村集落で暮らすひとびとがそれぞれの持つ技や宝物を最大限に活かしながら一人一人が主役となって活性化に取組んでいる地域のことをいいます。」（秋田県あきた未来創造部活力ある集落づくり支援室発行「あきた元気ムラの山菜・きのこ」パンフレットより）

図　ロジックモデルを援用したヒアリング抽出項目

また上記他１箇所（羽後町仙道地区）で予備調査を実施した。以下に時系列順に調査地及び状況写真を掲載する。

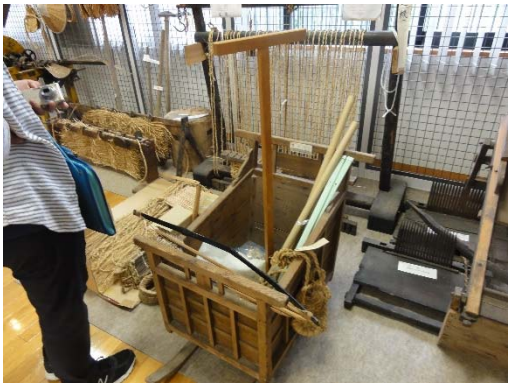
１）由利本荘市赤田地区　８月 29 日

２）男鹿市鮪川地区　８月 31 日

3）仙北市田沢地区　9 月 3 日

4）大館市山田地区　9 月 5 日

5）上小阿仁村南沢地区　9 月 7 日



（２）秋田元気ムラ大交流会におけるプレゼンテーション（９月１日）

秋田県湯沢市で行われた県主催の標記会に出席し、「学生が見た元気ムラ活動の可能性」の題目で、秋田県出身者をはじめとした協力学生を交えて、これまでの調査結果と今後の計画について、報告を行った。

写真　交流会での報告（左）と、協力いただいた秋田出身学生との記念撮影（羽後町古民家にて）（右）

（３）大仙市協和地区「よしかタンポポの会」との協同によるワークショップ　12･2 月

日本タンポポの栽培と活用を地域ぐるみで行う大仙市峰吉川地区のよしかタンポポの会の依頼に応じて、講演を行うとともに、活動のこれまでとこれからを考えるワークショップをコーディネートし、今後の教育･研究活動との連携策について検討を行った。

写真　日本タンポポ育苗の視察（左）と講演会での記念写真（右）　12 月 1－2 日

写真　ワークショップのフィードバック検討会　2 月 24 日

（4）元気ムラ･山菜ネットワークにおける追加調査と振り返りワークショップ　２月

夏季に行った地域づくり教育活動に関する調査分析結果をフィードバックすると共に、冬季の活動及び次年度活動についての関連情報の収集や取材、意見交換を行った。

上小阿仁村南沢地区、仙北市田沢地区、由利本荘市赤田区で実施した。

写真　追加調査の様子　仙北市田沢地区（左）、上小阿仁村南沢地区（右）

３．おわりに

2018 年度の調査活動の結果、地域活性化（生業創出）と人材育成（地域回帰）の双方に有益なものとなるような交流と学習の取組が求められていることが浮き彫りとなり、外部との連携を視野に入れた取組方策について検討された。

2019 年度には、交流と学習を盛り込んだプログラムを企画し協働で試行実践することを予定している。

【Ⅲ.研究ノート４】

寺院を拠点とした社会教育活動の試行実践研究

（北海道滝川市　運海寺）

仏教学科４年　杉浦寛生
仏教学科４年　田邊孝顕
教育人間学科４年　増山友香
地域創生学科専任講師　出川真也

１．はじめに

北海道滝川市運海寺において、食･観光･コミュニティをキーワードとした教育実践活動について調査を実施した。郷土資料館等での歴史学習、地域レジャー・自然体験、温泉などの癒し、精進料理等の地域伝統食について調査を行うとともに、寺院を活用したコミュニティ実践の可能性について模索した。

試行実践活動として、①寺院におけるお掃除交流活動「しゅりる」(本書Ⅱ章 p84 参照)、②こども精進料理教室を行った。これらを踏まえて③お寺を中高生から高齢者までの居場所とする寺院ラーニングコモンズ（ラーニングバー）構想について検討した。

写真　試行実践の場とした浄土宗運海寺

２．実施内容　２月 26 日－3 月 2 日

（１）早朝　寺院お掃除交流活動「しゅりる」の実践

１）雪かきボランティア

２）本堂お掃除ボランティア

（２）精進料理教室とお楽しみ会

（３）寺院ラーニングコモンズ（ラーニングバー）構想の検討

試行実践活動を踏まえながら、周辺の文協関連施設と連携しながら、寺院を交流と学習の場とする以下のアイディアを盛り込んだ寺院ラーニングコモンズ（ラーニングバー）構想について、検討を行った。

コンセプト：人と情報が集まり、新たな発想が生まれる場

・居場所として

・利用者とお寺のイベント（しゅりる等）との接点

・新しいビジネスを生み出す拠点に

運営に当たっては利用者同士のピアサポート･ピアラーニングを促進する専門スタッフの必要性が想定されることから、その育成についても検討が行われた。

３．おわりに－今後の構想について－

当調査の結果、地域寺院におけるソフト･ハード両面における公民館類似機能の存在が明らかとなった。今後信仰の問題を踏まえつつ、地域寺院の学習と交流の機能や地域づくり･活性化の役割について、実践研究を通じながら理解を深めていくこととしたい。

おわりに

大学事務方とのやり取りにおける紆余曲折があったものの、おかげ様で何とか課程の全授業を無事終えることができほっとしている。今年度の特徴は、学生が自ら主体的に課題を設定し、実際に実践研究に活発に取組んだことであるだろう。本書の第２章３章の個人研究実践や研究ノートの充実ぶりがそれを裏付けている。

ところで、社会教育人材養成に関わる教員・研究者は、大学組織の中でも一風変わった存在のように見える。彼ら・彼女らは、大学人でありながら、社会の現象的動向から離れて純粋に学問的立場をとる、ということはない。この意味ではアカデミズム的ではない。一方で、社会教育の理念と理想の追求において、現実の政治経済的圧力と妥協しない批判的精神態度を固く保持している。この意味ではアカデミズム的である。

このように考えると、社会教育人材養成にかかわる教員・研究者は、自身の研究・教育・実践活動を通じて、大学（学問）と現実社会を架橋し、その変革に携わることを専門とする社会活動（変革）家であるといえるのではないか。昨今、こうした立位置はその重要度を増しているが、一方で、特に古い体質の閉鎖的大学組織や関連業界では、内外共に厳しい試練に晒されがちなものとなっている。そのような中で、社会教育･生涯学習の社会変革の役割に目覚めた仲間たち（学生含む）には、臆することなく勇気を持ってその本来的使命に邁進してもらいたい。自戒をこめて決意する一年であった。

こうした使命を遂行するためには多くの支援者と連帯者が必要である。今年度も本書に登場する方々をはじめとして多数の皆様にご協力をいただいた。感謝申し上げたい。

2019 年３月

生涯学習施設実習担当教員　出川真也

多様な学びが拓くコミュニティづくりの可能性

ー教育からスポーツ・環境・福祉・観光・産業・信仰まで波及展開する

学習地域づくりの諸相ー

平成 31 年度生涯学習施設実習・研究活動報告　（初版）

発行日　平成 31 年３月 31 日

発　行　大正大学社会教育主事課程

〒170－8470　東京都豊島区西巣鴨３－20－１

印　刷　株式会社ティー・マップ